

児童生徒の問題行動に対する 教師の態度に関する研究

第三報告

小 川 一 夫

I 問 題

従来¹⁾の教育心理学的研究の多くが、教師の問題を等閑にふして、とかく児童生徒のみを対象化する傾向にあることに批判的でありたい。「教師と生徒の間に成立する心的解明」(1)こそ教育心理学の主要課題であろう。「教師自らの心理の解明なくして、児童の心理も教育方法も解明できない筈である」(2)と考へて、我々は先ず、Wickman, E. K. (3)以来数多くの人々(4)(5)(6)(7)によつて取上げられてきた問題行動に対する教師の態度を、わが国の教師に追試した結果、やはり精神衛生家の態度と違つて、明瞭な非行や、攻撃的な態度や、学習の進展を阻止するおそれのある行動を重視し、従順な引込思案的・内閉的な態度や、退行的な行動を軽視しがちな傾向を認めることが出来た(8)。

ところで、精神衛生家が内攻的な問題行動を重視するにも拘らず、教師はむしろ進攻的な行動を重視することからして、「教師の態度は素朴である」と結論づける傾きが今迄の Wickman 研究にあつた。我々は精神衛生家と教師の立場のちがいを直視し、従つて精神衛生家を規準として教師の態度を評価するのではなく、学級経営の場に立つ教師独自の問題としてこれを究明しようとした。即ち、教師の態度を、進攻的な問題行動を重視するものと、内攻的な問題行動を重視するものとに類別し、かかる教師の基本的態度の差異が、学級経営の面で如何に顕現するかという課題に取り組んだ。そしてさきの第二報告(9)ではその分節課題として、教師が担任学級の社会構造を観察する場合(第一課題)と、児童が担任教師に対する場合(第二課題)とを取上げ、教師の基本的態度に應じて如何なる差異があるかを検討した結果、第一課題からは、内攻的な問題行動を重視する態度の教師の方が、学級の人気児童は勿論のこと、排斥児童にも、また孤立児童にも広く眼を向け、彼等をかなり正しく観察しているのに反し、進攻的な行動を重視する態度の教師にあつては、人気児童や排斥児童はまずよいとして、孤立児童を見誤る傾向の大であることが判明した。なおそれは排斥児童と孤立児童に対する未分化な態度として現れていることも考察された(10)。かくして学級の児童観察の点で、内攻的問題行動を重視する態度が教師の基本的態度としてすぐれていることを明白にうかがい得たが、第二課題については、二つの学級を抽出しての予備研究にとどまり、まだ十分な解明を果し得ないままであつた。

従つてこの第三報告では、担任教師に対する児童の態度を、二つの教師の基本的態度に於て比較検討することを継続したい。而して、もし内攻的問題行動重視の教師の側に、すぐれた教師—児童の人間関係が見出されるならば、内攻的問題行動重視の態度が、精神衛生家の態度に類似しているからでなくして、むしろ教師独自の学級経営の立場に於てすぐれた機能をもたらすが故に、望ましい教師の態度として強調されねばならないであろう。

Ⅱ 研究 方 法

1. 対 象

さきの第二報告では、調査対象として、進攻的問題行動を重視する教師8名(男4,女4)と内攻的行動を重視する教師7名(男3,女4)を抽出したが、そのうち両群から1名ずつはすでに予備調査の対象とし、その担任学級児童に教師観の調査を実施して来たので、それらを今回は省き、残りの進攻群教師7名及び内攻群6名の担任学級全児童513名をここでは直接の対象とした。

2. 調 査 時 期

昭和30年12月上旬より昭和31年1月下旬に及ぶ。

3. 調 査 方 法

第二課題の予備調査としてさきに用いた『教師と児童の人間関係調査票』は、内含する調査問題も少く且つ杜撰なものであることを反省し、ここではT. P. T. (竹内式パーソナリティテスト)のうちの『対教師テスト』を試行した。調査の内容が担任の教師に関するものであるから、実施に際しては、絶対に秘密を守ることを約し、且つ無記名で、充分児童に安心感を与えたあとで筆者自身が行つた。

なおテスト問題は、「親和」、「信頼」、「尊敬」、「嫌悪」、「恐怖」、「逃避」、「不満」の7項目よりなり、1項目8つずつの質問から構成されている。質問に対する児童の回答は、「はい」「いいえ」「どちらでもない」の三通りとなつている。

4. 整 理 方 法

「親和」、「信頼」、「尊敬」などの各項目ごとに、そこに含まれる問題に対する回答の割合に応じて、100点尺度での評点が求められる。そして評点は全て、どの項目についても100点に近い方が教師に対する好ましい態度を意味している。

Ⅲ 結 果 及 び 考 察

1. 学級での教師と児童の人間関係について

進攻的問題行動を重視する教師群と内攻的問題行動を重視する教師群でのT. P. T.の結果を、各学級ごとにとりまとめ平均値で示すとTable 1の通りである。

Table 1 T.P.T.の平均値及び標準偏差値

態度	教師	性	年齢	教職年数	担任学年	児童数	親和	信頼	尊敬	嫌悪	恐怖	逃避	不満	計
進 攻 的 行 動 を 重 視	T.N.	女	21	1:5	3	35	80.3	81.2	81.7	89.7	78.3	85.8	85.8	83.3 (12.3)*
	S.S.	男	29	8:5	6	40	57.4	65.0	66.0	72.4	65.9	74.3	72.3	67.6 (14.0)
	T.H.	男	35	16:5	4	41	72.2	67.9	70.2	82.3	74.3	82.9	82.2	66.0 (11.1)
	H.M.	女	21	1:5	3	39	72.6	76.7	73.7	87.2	81.0	85.0	83.8	80.0 (12.2)
	M.H.	男	36	16:5	5	27	62.0	73.2	71.3	84.0	71.0	76.9	80.3	74.1 (7.9)
	K.H.	女	28	9:5	2	51	83.8	76.7	82.0	81.6	77.1	81.4	81.4	80.6 (11.7)
	R.I.	男	27	7:5	6	47	53.0	65.3	70.1	74.3	70.6	64.3	77.1	67.8 (19.5)
内 攻 的 行 動 を 重 視	U.Y.	男	32	10:5	6	39	62.9	71.5	62.1	79.4	74.5	81.4	80.3	73.2 (14.8)
	M.M.	女	31	12:5	2	42	86.5	83.3	79.7	85.5	80.8	89.3	91.2	85.2 (10.8)
	F.O.	女	34	15:5	5		* *							
	N.Y.	男	30	8:5	6	48	74.4	71.4	69.9	86.6	78.9	85.0	85.6	78.8 (13.9)
	K.Y.	女	26	6:5	3	56	77.0	84.3	76.9	90.3	85.5	82.6	90.4	83.4 (9.1)
	S.M.	男	28	6:5	6	48	76.0	80.3	76.6	89.0	81.2	81.2	90.3	82.1 (10.0)

* …… () は S.D. を示す

** …… F.O. の教師は学年途中で担任学級が変わったため資料を欠く

教師の児童観察に於てのみならず、児童の教師に対する態度にあつても、内攻的行動重視の態度の教師の方が進攻的行動重視の教師よりもすぐれているであろうという仮説のもとに出発したのではあるが、T.P.T. 調査の結果からは内攻的行動重視の教師群のすぐれていることを実証することは出来ない。教師に対する児童の態度の面では、両群教師間に差異のないものと認めねばならない。教師による児童の観察は教師の主体的な問題であるだけに、両群教師間に極めて顕著な差を見出し得たが、児童の教師に対する態度にあつては、ここで我々の問題とする教師の基本的態度以外の諸要因が働くものであろう。例えば上表に於て、両群共に女教師の場合が男教師より高い評点を獲得していることは示唆に豊んでいるかと思う。教師の性差、年齢差、児童の発達の条件(評価能力に関係する)、あるいは地域的条件などを統整した上での研究が必要かと考える。

このように両群間に T.P.T. の平均得点についての差が認められないとしても、次に予測される問題は、内攻的問題行動を重視する教師のもつ児童との人間関係の方が、進攻的な行動重視の教師の場合よりも、一層その学級の内部にあつて等質性(安定性)を示すのではないかということである。換言すれば、内攻群の方がその学級内で T.P.T. の得点の個人差が少く、平均値の周辺により凝集しているのではないかという仮説である。然しながら、T.P.

T. 各項目についての検討はおくとしても、得点計について求めた標準偏差値(S. D.)を見れば判る通り、変異係数を算出するまでもなく如上の仮説を棄却しなければならない。即ち教師に対する児童の態度が、特に内攻群にあつて高い内部安定性を示すものとは云われぬ。

2. 排斥児童及び孤立児童の教師に対する態度について

我々が既に明らかにして来た如く、教師の行う児童観察にあつては排斥児童と孤立児童に関して両群教師間に著しい差異の存在したことから考へて、学級全体としては教師に対する児童の態度に差異が認められなくても、学級内で排斥される傾向の強い児童や孤立に傾き勝ちの者については、両群間にあるいは違いがあるのではなからうか。進取的行動重視の教師は排斥児童ではまずよしとしても孤立児童を見誤りがちであるので、内攻的行動を重視する教師は排斥に対し排斥児童と同時に孤立児童をもよく観察していることから発展して、教師に対する孤立児童の態度が、内攻群に於て進攻群にまさるかもしれないとの仮説を持つことが許されよう。

然し、この問題を検討するためには、さきに抽出した排斥児童及び孤立児童ではその数があまりに限られている(そこでは大体教師の列挙数に合致させる必要があつた)ので、該当児童の枠をもう少し広めたいと

Table 2 進攻群での排斥に傾く児童のT.P.T.得点

教師	児童	性	拒否的グループ社会距離比	T.P.T.得点	T.P.T.得点 T-score
T. N	岩和	男	11.3	70	39.2
	岩透	男	57.5	73	41.6
	川正	男	21.3	92	57.1
	森博	男	18.8	89	54.6
	本レ	女	11.3	94	58.7
	堀洋	女	13.8	92	57.1
S. S.	三仁	男	47.7	91	66.7
	中信	男	15.0	55	41.0
	三恵	男	34.4	81	59.6
	三朝	女	18.3	33	25.3
T. H.	西茂	男	37.9	59	34.7
	伊正	男	15.9	52	28.4
	奥健	男	19.5	54	30.2
	伊邦	男	20.5	67	41.9
	山礼	女	30.3	72	46.4
	常牙	女	27.2	48	24.8
	岡闖	女	15.9	95	67.1
	西幸	女	17.4	75	49.1
H. M.	赤岩	男	10.8	70	41.8
	田輝	男	11.4	81	50.8
	田美	女	11.9	86	54.9
	田あ	女	21.1	97	63.9
	大民	女	17.8	74	45.1
	大静	女	23.2	51	26.2
	竹紀	女	13.5	80	50.0
竜敏	女	17.3	53	27.9	
M. H.	田伸	男	70.4	78	54.9
	神光	男	10.4	78	54.9
	安勝	男	16.0	71	46.1
	三一	男	12.0	83	61.3
	伊勲	男	55.2	78	54.9
	和一	男	10.4	75	51.1
	三幸	女	22.4	88	67.6
K. H.	石伸	男	17.5	86	54.6
	三気	男	40.8	87	55.5
	衛敏	男	20.0	54	27.3
	岩加	女	12.9	89	57.2
R. I.	高大	男	23.0	87	59.8
	三三	男	32.8	41	36.3
N = 39 計					1865.6
					平均値 47.8

思う。そこで便宜的ではあるが、拒否的グループ社会距離比（さきには拒否的グループ社会距離指数として使用したもの。即ち $[-G.L.] = 100 [-G] / 5 (N-1)$ 。その性質から考えて、以後社会距離比と訂正する）10以上（さきには20以上）をもつて排斥される傾向のある児童とし、又積極的・拒否的両グループ社会距離比の和が2以下（さきには1以下）をもつて孤立の傾向のあるものと見做す。かかる規準で抽出される児童の T. P. T. 得点を、進攻・内攻両群別に比較考察することになるが、更に各学級での T. P. T. 平均得点及びその標準偏差値が区々であることを考慮するならば、当該児童の得点をそれぞれの学級内で標準得点化（T-Score 換算）することが必要視される。と

云うのも、排斥に傾く児童及び孤立に傾く者が T. P. T. で何程の評点を得ているかということよりも、彼等がそれぞれその学級内で相対的にみて、教師と如何なる関係位置を占めているかを進攻・内攻両群で比較することに、我々の問題点があるからである。

かくして各学級から抽出された者の社会距離比、T. P. T. 得点、及びその偏差値（T-Score）を示すと Table 2, 3, 4, 5. の如くである。なおここでは T. P. T. 得点を各項目について分析することなしに、各項目得点の平均値をもつて個人の T. P. T. 得点と見做しておこう。

このようにして得られた T. P. T. 偏差値（T-Score）について、その平均値を進攻・内攻両群別に求めるならば、平均値の差の検定を行うまでもなく、排斥に傾く者についても、又孤立に傾く児童においても、両群間に差異のないことが明瞭である。従つて内攻的な問題行動を重視する教師の場合の方が、その学級内で孤立に傾く者の対教師関係の点で特にすぐれているということにならない。

Table 3 内攻群での排斥に傾く児童の T.P.T. 得点

教師	児童	性	拒否的グループ社会距離比	T.P.T. 得点	T.P.T. 得点 T-score
U. Y.	柳 盾	男	17.0	30	20.8
	武 清	男	13.3	52	35.7
	森 日	男	47.9	56	38.4
	五 年	男	18.2	55	37.7
	河 芳	男	18.2	49	33.6
	柳 直	女	13.9	67	44.3
	中 保	女	13.3	54	37.0
M. M.	錦 吉	男	25.7	49	16.5
	飯 幹	男	13.3	61	27.6
	三 信	男	39.0	94	58.1
	山 房	男	11.4	87	51.7
	福 悦	女	12.9	87	51.7
	神 栄	女	10.5	94	58.1
N. Y.	片 省	男	18.6	54	32.3
	瀬 章	男	17.3	91	58.8
	足 俊	男	12.3	48	28.6
	音 満	男	49.1	56	33.6
	森 義	男	15.0	86	55.2
	布 昌	男	22.3	90	63.8
	渡 文	女	14.5	86	55.2
	外 笑	女	11.4	72	45.1
	曾 ミ	女	36.8	76	48.0
	桑 佐	女	18.2	85	54.5
大 多	女	29.1	92	65.3	
K. Y.	福 健	男	32.8	82	48.5
	森 整	男	54.0	92	59.5
	炭 陸	女	10.2	80	46.3
S. M.	森 裕	男	10.2	80	47.9
	川 操	女	15.8	91	58.9
	滝 治	女	17.7	94	61.9
N = 30				計	1374.5
				平均値	45.8

Table 4 進攻群での孤立に傾く児童のT.P.T.得点

教師	児童	性	積極的拒否的 グループ別 距離比の和	T.P.T. 得点	T.P.T. 得点 T-score
T.N.	岩 昭	男	0	84	50.6
	嶋 千	女	0	87	53.0
S.S.	南 あ	女	1.1	73	53.9
	中 寿	女	0	83	61.0
T.H.	岡 敏	男	1.5	76	50.0
	伊 正	男	0	76	50.0
	伊 一	男	1.5	91	63.5
	西 忠	男	0	75	49.1
	福 和	女	0	87	59.9
H.M.	中 道	男	1.6	87	55.7
	鍋 時	男	0.5	72	43.4
	植 松	男	0	90	58.2
	青 伸	男	0	79	49.2
	湯 敬	女	0	84	53.3
M.H.	神 信	男	2.0	80	57.5
	落 美	女	2.0	72	47.3
K.H.	中 孝	男	1.2	75	45.2
	小 哲	男	0	84	52.9
	今 文	男	0	75	45.2
	桑 雄	男	0	89	57.2
	桑 幸	男	1.7	86	54.6
	泰 和	男	0	78	47.8
	梶 有	男	0	62	34.1
	大 洋	女	1.7	78	47.8
三 典	女	0.8	84	52.9	
R.I.	中 哲	男	1.3	64	48.1
	川 浩	男	1.3	47	39.3
	藤 健	男	0	24	27.5
	和 正	男	0	64	48.1
	林 繁	男	0	40	35.7
	春 三	女	0	81	56.8
	原 三	女	0	87	59.8
	元 恭	女	1.7	94	63.4
	井 礼	女	0	81	56.8
	本 隼	女	1.7	76	54.2
山 紀	女	1.3	76	54.2	
N = 36				計	1817.2
				平均値	50.5

T. P. T. で検討した範囲内ではあるが、児童と教師の人間関係はここでも我々の仮説に相反して、両群教師間に何らの差異ももたしていない。

3. 友人選択にみられる学級の雰囲気

気について

最後に、Sociometry にあらわれた学級の雰囲気感を考究してみたい。我々がさきに学級の社会構造を把握する目的で使用して来た Sociometry では、好きな友人を学級内で列挙させる所謂積極的選択も、また嫌いな友人をあげさせる所謂拒否的選択も、共に列挙人数を制限していなかった。そこでこれら両選択において自由に相互に友人を列挙する割合がどうであるかによつて、その学級の雰囲気感をある程度捕捉出来ると思う。例えば積極的選択での相互作用が、拒否的選択の場合に比べて大きい時には、その学級はより親和的、より協力的な雰囲気をもつと考えてよからうし、両選択の相互作用がその逆の関係にあつて、嫌いな友人を相互に挙げることの方が盛んであるとすれば、その学級はより排他的、より非協力的な雰囲気感を構成しているとみることが許されよう。Sociometry にみられる学級内の相互作用の指標として、我々は古来よく使用されている相互作用指数 (interaction index) (11) を用いた。それ

は、可能な全選択に対する、現実になされた選択 (C) の百分率で示されるものである。即ち $A.I. = C \times 100 / N(N-1)$ による。

Table 5 内攻群での孤立に傾く児童のT.P.T.得点

教師	児童	性	積極的拒否的 グループ数の 距離比の和	T.P.T. 得点	T.P.T. 得点 T-score	
U. Y.	安持	省	男	1.8	88	60.0
	豊	豊	女	0.6	70	47.8
	石	淑	女	1.2	70	47.8
	柳	キ	女	0	91	62.0
	持	美	女	0	91	62.0
M. M.	持	妙	女	0	91	62.0
	竹	弘	男	0.5	89	53.5
	宮	俊	男	1.4	84	48.9
	園	百	女	0	89	53.5
N. Y.	森	ト	女	0.5	89	53.5
	渡	祥	男	0	68	42.2
	山	諒	男	0.5	71	44.4
	岡	安	男	1.4	88	56.6
	岡	幸	女	0	86	55.2
	飯	礼	女	0	73	45.8
K. Y.	原	教	女	0.9	91	58.8
	糸	喜	女	0	83	46.5
	尾	和	男	1.7	63	27.6
	米	進	男	1.7	74	39.7
	高	修	男	0	86	52.9
	大	敏	男	0	89	56.2
	倉	保	男	1.7	73	38.6
	中	宏	男	0	92	59.5
	来	和	男	1.7	84	50.7
	庄	達	男	0.9	75	40.8
S. M.	渡	由	女	1.7	87	54.0
	森	淳	女	1.3	89	56.2
	持	妙	女	1.7	90	57.3
	鎌	和	男	1.4	80	47.9
	千	興	男	0	91	58.9
	別	恒	男	1.9	76	43.9
	黒	敏	男	1.9	84	51.9
	久	晃	男	0	98	65.9
成	忠	男	0	73	40.9	
S. M.	梶	有	男	0	77	44.9
	若	周	女	0	67	34.9
	森	正	女	0	67	34.9
N = 37				計	1858.1	
				平均値	50.2	

従つて、各学級ごとに積極的選択と拒否的選択における相互作用指数を求めると、Table 6 の如くまとめられ、更に両指数の比から学級内の親和度を決定するならば、進攻群での H. M. 教師の学級と、内攻群の N. Y. 教師の学級を除き、進攻群の全ての学級では、積極的選択の場合よりも拒否的選択の場合の友人列挙が多く、逆に内攻群の全学級では積極的選択の方が拒否的選択の時よりも多くの友人を挙げていることが判る。両群の平均親和度の差の検定によつても、5%以下の危険率で内攻群の方が親和度が大であると云える。

かくして、内攻的な問題行動を重視する教師の担任する学級の雰囲気、進攻的な行動を重視する教師の学級よりも一層親和的・協力的であることから推論するならば、この報告の主要課題である児童と教師の間関係についての仮説はことごとく棄却されたとはいへ、我々の推定した教師の問題行動に対する基本的な態度は、ただ単に教師が担任の児童を観察する場合の如き教師の主體的領域にのみ止らず、それは何らかの程度に於て児童・生徒の側に影響を及ぼし、学級経営の諸面で種々顕型化してくるものと思う。

Ⅲ 要 約

Wickman 研究の追試である第一報告から出発して、内攻的問題行動を重視する態度のすぐれていることを、我々は教師独自の立場に於て解明しようとした。第二報告にあつて、学級の

Table 6 ソシオトリーにおける
相互作用指数

態度	学級	積極的選 択相互作用 指数	拒否的選 択相互作用 指数	親和度
進 攻 的 行 動 を 重 視	T. N.	7.38	7.67	0.96
	S. S.	5.63	8.78	0.64
	T. H.	6.66	7.69	0.87
	H. M.	8.78	8.54	1.03
	N. H.	11.69	13.69	0.85
	K. H.	4.03	5.45	0.74
	R. I.	4.43	4.72	0.94
	N = 7 計			6.03
		平均値		0.86
		S. D.		0.134
内 攻 的 行 動 を 重 視	U. Y.	11.14	7.93	1.40
	M. M.	9.96	9.80	1.02
	F. O.	8.49	4.06	2.09
	N. Y.	9.19	10.45	0.88
	K. Y.	4.29	3.76	1.14
	S. M.	6.34	2.11	3.01
		N = 6 計		
		平均値		1.59
		S. D.		0.816

両群間平均親和度の差の検定

$$t=2.15 \quad df=11$$

one tail test とみれば、 $0.025 < P < 0.05$

相互作用指数に拠つて検すると、明らかに内攻的行動を重視する教師の学級の方がより親和的、より協同的であることをうかがい得た。従つて、我々の考える教師の基本的態度は何らかの程度において学級の児童に影響しているものと思う。

(5) 我々の今日までの研究では、内攻的行動を重視する態度が、進攻的行動重視のものよりいくつかの点ですぐれている事を学級経営に関して指摘し得た。そこで内攻的行動を重視する態度が教師の態度として望ましいものであると結論づけたい。

V 発 展 課 題

この報告に於て反省される二三の点を、次の発展の拠点として記すならば次の通りである。

まず T. P. T. の項目分析に関してであるが、T. P. T. による診断が全項目を総括しての平均値によらず、むしろ個人内の変異に注目することから考えても、今後項目分析の必要であることを痛感する。それによつて、あるいは教師に対する児童の態度の面でも進攻・内攻両群間に差異を把握出来るかもしれない。

また今後、学級経営の分節的課題のうちで、より中核的な問題と考えられる学習指導または

社会構造を観察する点で内攻的行動重視の教師が有意にすぐれていることを究明したのに引続き、本報告に於ては、児童の教師に対する態度の面でどうあるかを直接問題とした。結果の多くは我々の仮説を必ずしも肯定しなかつたけれども、この研究で得られた主な結果を概括すれば、次の如くまとめられる。

(1) 進攻的な問題行動を重視する教師と、内攻的な問題行動を重視する教師の二つの基本的態度について、担任学級の児童に課した教師観の調査からは、総括的な差異を何ら見出し得なかつた。

(2) 教師に対する児童の態度を、学級内部の等質性の点でみても、両群間に何ら差異なきものと認められた。

(3) あるいは、内攻的行動重視の教師が学級の孤立児童をよく観ていることにかんがみて、孤立がちな児童の対教師観にあつては両群間に差異が現れるかとも予測したが、これまた明瞭な差異は存しなかつた。

(4) 然し、学級の雰囲気や Sociometry の

生活指導面での両態度の差異を追求することによつて、教師の基本的態度としては、内攻的な問題行動を重視することの必要である点を一層強調して行きたい。

而して更には学習指導的な問題と、既に報告した学級の社会構造の観察との関連にも論及したい。何となれば、教師の児童をみる眼には彼等の学習成績の要因がかなり大きく作用していることを、我々の別の研究(10)が明らかにしているからである。

調査の対象学級の諸先生には、引続き再三の調査にも拘らず、絶大な協力を賜つたことを記して深謝する次第です。

なお本研究の一部は昭和30年度文部省科学研究助成補助金によるものである。

文 献

- (1) 依田新：教育心理学の課題，理想，昭和24年，2月，P.33
- (2) 玉岡忍：教育心理学，昭和23年，P.35.
- (3) Wickman, E.K. : Children's Behavior and Teachers' Attitudes. 1928.
- (4) Ellis, D.B. & Miller, L.W. : Teachers' Attitudes and Behavior Problems. J.of Educ. Psychol., 1936, 27, PP. 501—511.
- (5) Mitchell, J. C. : A Study of Teachers' and Mental Hygienists' Rating of Certain Behavior Problems of Children. J. of Educ. Research, 1942,36, PP.292—307.
- (6) Sparks, J. N. : Teachers' Attitudes toward the Behavior Problems of Children. J.of Educ.Psychol., 1952,43,PP. 284—291.
- (7) Schrupp, M.H. & Gjerde, C.M. : Teacher Growth in Attitudes toward Behavior Problems of Children. J. of Educ. Psychol., 1953,44,PP.203—214.
- (8) 小川一夫：児童生徒の問題行動に対する教師の態度に関する研究（第一報告），島根大学論集，第5号，昭和30年，PP.1—19.
- (9) 小川一夫：児童生徒の問題行動に対する教師の態度に関する研究（第二報告），島根大学論集，第6号，昭和31年，PP.1—14.
- (10) 小川一夫：学級の社会構造に対する教師の態度に関する研究（第二報告），教育心理学研究，第4巻，第1号，昭和31年6月，PP.46—54.
- (11) 大塩俊介：ソシオメトリー。心理学講座（日本応用心理学会編），第10巻，Ⅵ，P.24.